整形外科

下肢牽引患者の離被架と離被架カバーの工夫

発表者　清住和子
整形外科一同

Ⅰ はじめに

整形外科において、下肢の骨折患者に対し、各種の牽引療法時離被架が使用されるが、従来の方法は多くの欠点があった。そこで問題点を解決するために、離被架及び離被架カバーの工夫を考えてみた。

Ⅱ 問題点

(1) 保温が不十分

スライドⅠの様に、離被架を2個重ねて使用していたので、空洞が多く、特に冬期には下肢の冷感を訴えることが、しばしばであった。

(2) 牽引効果が防げられ又、看護の観察、処置が容易に行えず、美観に欠けていた。保温効果をあげるために、毛布を4～5枚使用して、スライドⅡの様に離被架をおおっていたため、牽引が防げられたり、患部の疼痛を訴えたり、観察処置を行う時にも、その毛布を除去しなければならない。又、シーツ交換時や、離被架の組立て時に、多くの時間がかかった。

(3) 健側の運動を防げる

整形外科において、健側の早期リハビリテーションが重要である。今までは、スライドⅢの様に、離被架が大きすぎるために、健側の運動を妨げていた。

Ⅲ 研究目標

(1) 安価で簡単に保温できるもの

(2) 牽引及び治療効果を防げず、美観にすぐれているもの

(3) 観察や看護処置が容易にできるもの

(4) 健側の運動を防げないもの

Ⅳ 実際

(1) 離被架の工夫

整形外科において現在使用している離被架は、スライドⅢの様に、高さ32cm、巾55cm、長さ55cmの離被架を2個重ねて、スライドⅠの様に使用して、必要以上に大きく、安定性が悪かった。これを1個で目的が達せられないかと考えた。

当科にある最大の離被架、高さ32cm、巾65cm、長さ58cmを作り、下肢架台の巾、28cmに合わせ、高さは高挙に必要な高さに足の大きさを加えた。55cmにし、当院の磨工に

依頼して、目的の型に作ってみた。

(2) 離被架カバーの工夫

看護学雑誌７３年１月号に離被架カバーの工夫が発表され、これを参考にして考えてみたが、これはスライドⅣの様に牽引の方向の調節が不可能という、欠点があったので、次の様な離被架カバーをつくってみることにした。

離被架カバーの原型図参照

離被架カバーの中央にわれ目を入れて、どの方向の高さからもロープを出せる様にし、ボタン、スナップいずれかで止める様にし、すき間をなくした。カバーのすそは２０cmの折り込みをつけ、マットレスの下に折り入れる様にした。

前面には３０cm位余裕を持たせ、腰部の保温ができるようにした。

材料については毛布を使い、その上に厚手のキャラコを重ねるようにした。

Ⅴ 考 察

工夫した離被架及び、離被架カバーを実際に使用してみて、保温の点では今まで湯タンポを使用しなければ、下肢の冷感が強かったのが、今回は８６才のおばあさんでも、ほとんど湯タンポを使用せず保温の目的を達する事ができた。

又、牽引のロープも離被架カバーにより、重い毛布がかからなくて、十分牽引効果をあげることができ、牽引の方向もどの高さにもする事ができた。

看護観察処置も以前より手間がかからなくてでき、見た目にもよいと思う。

すき間風を防ぐために今回はボタンを使用したが、ループへボタンを止める事は手間がかかるために、スキー製品に使用されているファスナーは、上下に開閉できると聞いたので、使用してみようと思う。

離被架カバーの材料は、今回は毛布と厚手のキャラコを使用したが、今後洗たく、外観等検討する必要があると思う。

健側の運動も離被架の巾が狭いために十分行え、安定性も十分であった。

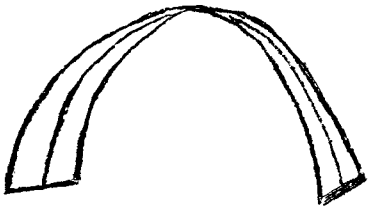
今回の工夫は整形外科にある代表的な看護用具であるがまだまだたくさんの昔から使用しているものもあり、今後１つ１つ検討していく必要があると思う。

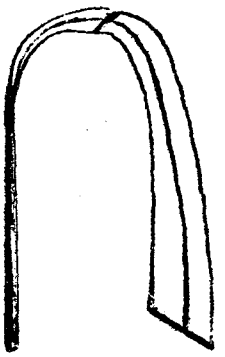
スライド説明

1 離被架を２個重ねて使用しているもの
2 離被架を２個重ねその上を毛布でおおっているもの
3 巾の広い離被架
4 看護学雑誌１月号の写真
5 離被架カバーをつけたもの

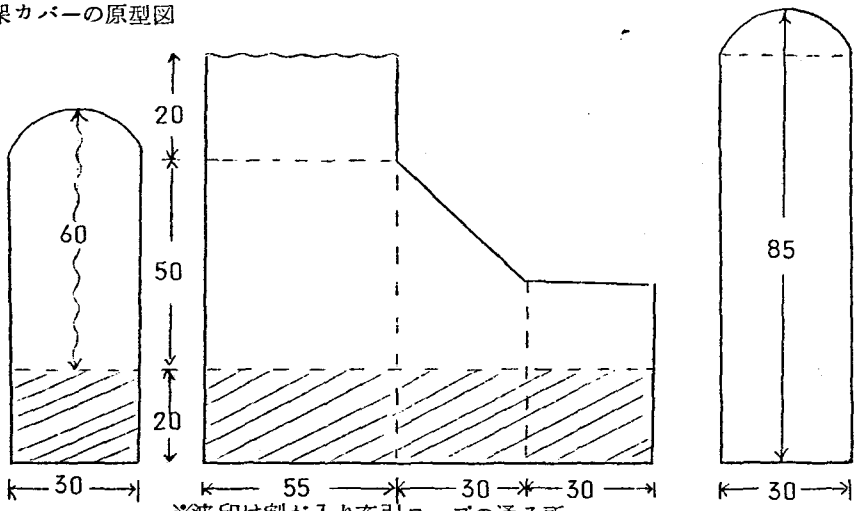
〔改良後〕

〔改良前〕





離被架カバーの原型図



※波印は割が入り牽引ロープの通る所
斜線部は折り込み